

2026 年 8 月 3 日

【XCR スプリントカップシリーズ 第 4 戦 / 群馬県長野原町・嬭恋村】 「ASAMA ATTACK」でヨコハマタイヤ勢が総合トップ 3 を独占!!



(総合優勝した CUSCO YH ジョランダーライトン)

2026 年は全 7 戦のカレンダーが組まれている、クロスカントリーと SUV 車両で競われるラリーシリーズ「XCR スプリントカップ」。シーズンの折り返しとなる第 4 戦は 8 月 1 日(土)・2 日(日)に群馬県長野原町をホストタウンに隣接する嬭恋村で開催、初の XCR Sprint Cup の単独開催となる「ASAMA ATTACK」が行われた。

本大会に参戦したのは Closed クラスの 4 台を含む 28 台という盛況ぶり。競技は嬭恋村にあるクローズドのダートコース「アサマレースウェイ」と、同村内の林道に設けられたグラベル(未舗装路)の SS(スペシャルステージ)が舞台。2 日間で 7 本の SS、合計距離 22.66km が戦いの舞台となった。

天候に恵まれた週末、戦いの幕開けとなるオープニングの SS1 は、アサマレースウェイでの「Asama 1 (1.78km)」。

幸先よくこのステージを制したのは「CUSCO RACING」から三菱・トライトンで参戦する柳澤宏至選手／加勢直毅選手組、国内外のラリー経験豊富なクルーだが XCR については前戦の秋田で初参戦、その実力をあらためて見せるかたちとなった。

SS2 は林道に舞台を移して「Kurumazaka 1 (6.88km)」。

峠の登り区間だが後半は“七曲がり”のようなツイスティな道のりとなる。ここはライバル勢がベストタイム、ヨコハマタイヤの「GEOLANDAR」勢ではタイから参戦の Mana Pornsiricherd 選手／ Kittisak Klinchan 選手組(トヨタ・ハイラックス)がセカンドベスト、柳澤選手組はサードベストでトップが入れ替わる。

舞台を再びアサマレースウェイに移しての SS3「Asama 2」、ここでトップのライバルは車両トラブルで戦列から消え、昨年まで 4 年連続でチャンピオンを獲得している番場彬選手が藤田めぐみ選手とのコンビで駆るトヨタ・ハイラックスがステージベストをたたき出し、3 番手にポジションをアップ。Mana 選手組がセカンドベスト、柳澤選手組はサードベストで順位は柳澤選手組がトップ、Mana 選手組が 0.8 秒差の 2 位、番場選手組が 6.8 秒差の 3 位と、「GEOLANDAR」勢がワン・ツー・スリー・フォーメーションを構築した。

番場選手組は初日を締めくくる SS4「Asama 3」でも連続ステージベストで差を詰めた一方、柳澤選手組はセカンドベストで安定した走りを見せる。初日を終えて柳澤選手組がトップ、2 位の Mana 選手組は 1.7 秒、そこから 3.7 秒差の 3 位が番場選手組という、「GEOLANDAR」勢による三つ巴となって競技は二日目を迎える展開に。

一夜明けた嬋恋村も朝から好天に恵まれ、まずはアサマレースウェイを昨日とは逆方向に走る SS5「Asama Reverse 1」(1.78km)から Leg2 がスタート。勢いに乗る番場選手組が前日から 3 連続となるステージベストで 2 番手へ浮上したが、林道へ舞台を移した SS6「Kurumazaka 2 (6.88km)」は、登り区間での優位性を武器に Mana 選手組が本大会初となるステージベストで再び 2 番手を取り戻してシーソーゲームが激化していく。



(総合 2 位の「CUSCO YH ジオランダー・ハイラックス」)



(総合 3 位の「FAST FORWARD HILUX」)

勝負を決する最終 SS までの順位は、トップが柳澤選手組、2 番手は 2.2 秒差の Mana 選手組、そこから 1.1 秒差の 3 番手が番場選手組という「GEOLANDAR」勢による大接戦。戦いを締めくくる SS7「Asama Reverse 2」は 1.78km、短い SS だがワンミスで順位は変わる可能性もあるため、関係者もギャラリーも手に汗握る接戦の行方に注目が集まる。

そんな中、最終 SS でステージベストを刻んだのは番場選手組、これで Mana 選手組を再逆転して 2 番手でフィニッシュ。Mana 選手組は 3 番手、そして終始安定感の高い走りを見せた柳澤選手組が番場選手組を 1.2 秒振り切って優勝を飾り、柳澤選手組は XCR Sprint Cup 参戦 2 戦目の優勝で、高い実力をあらためて見せる結果となった。

こうして XC-2 クラスのトップ 3 を「GEOLANDAR」勢が独占したほか、XC-1 クラスの惣田政樹選手／猿川仁選手組(デリカ D:5)、XC-3S クラスの大塚祐樹選手／HANA 選手組(ライズ)が優勝を飾り、Closed を除く全 5 クラス中 3 つのクラスを「GEOLANDAR」勢力が制して強さを見せた。



(XC-1 クラス優勝の「ジオランダー・ブラ V・SF・デリカ D5」)



(XC-3S クラス優勝の「トゥーザコアメーブル SF GEO ライズ」)

■ 柳澤宏至 選手 (CUSCO YH ジオランダーライト)

前戦の秋田を終えて、マシンは足回りやブレーキバランスなどのセットアップを煮詰めて来ました。ドライバーの自分自身もマシンの操作性というか扱い方に慣れてきて、「こんな感じで走らせると、こんなタイムになるんだな」というところが分かってきてオープニングステージでのベストタイムにもつなりました。結果としてベストはオープニングの 1 本のみでしたが、ライバル勢がステージ毎に多少の波があるなかで、自分たちは安定していたことが勝利につながったと言えるでしょう。

自分としては一所懸命に走っているだけですが、そんなにミスも無く淡々と走った感じでした。林道のステージでは根石も多くあったのですが、余程のインカットなどをしない限りはマシンもタイヤも全然問題ありません。パンクするかもというような不安も皆無で、しっかり攻めて行くことが出来ました。

終盤にはチームメイトの番場選手組が追いつけてきましたが、こちらも追いつかれないように、やれることをやって走って逃げきれました。

■ 番場 彬 選手 (CUSCO YH ジオランダーハイラックス)

ともに「GEOLANDAR」を装着するハイラックスを駆る Mana 選手との接戦になりましたが、パワーの差があるので林道ステージではそこをカバーするために 2 日目ではミッションのマニュアルモードを活用してパワーバンドを外さない走らせ方で攻めていきました。「Asama」でステージベストを重ねて「Kurumazaka」の分を取り返す、という流れになりましたが、あと一步トップには届かなくて悔しいですね。

最終ステージに持ち越された勝負は自分が 3 番手、前に行く Mana 選手組はなんとしても逆転しなければと思いつつ、タイム差的にトップまでは柳澤選手組に何かなければ難しいところだったので、身内の不幸を願うのは嫌ですから今後のシリーズ展開を考えて Mana 選手の前に出ること、1.2 秒差をひっくり返すことに集中して臨みました。そのうえで、「あわよくば……」という思いもありましたが(笑)。

2 位で悔しい部分もありますが、車の走らせ方ひとつとってもいろいろなデータをとれて、車の“活かし方”を知ることが出来たので、収穫の多い一戦となりました。